

多様な利用者の視点から見た釣り場環境分析

千葉工業大学 学生会員 ○田中 卓介

千葉工業大学 フェロー 五明 美智男

1. はじめに

食糧確保の手段として生まれた「釣り」は、現在では自然や魚と触れ合い楽しむためのレクリエーションとしても親しまれている。家族や個人、老若男女を問わず多くの人々が興じることのできる遊漁のなかでも、マハゼは誰にでも簡単に釣ることができる最もポピュラーな対象魚として知られている。さらに釣れた魚の量、大きさからその年の資源量や成長度合い、環境の変化などを評価する手段として過去に継続的な調査が行われた魚でもある。¹⁾

本研究では、河川の底質調査やマハゼ釣り調査による「直接的な情報」に加え、実施例の少ない釣り人や河川利用者へのインタビュー調査を行い、マハゼ釣り場として評価の高い江戸川放水路の釣り場環境について、「利用者視点の情報」(図1)として分析を行うことを目的とした。

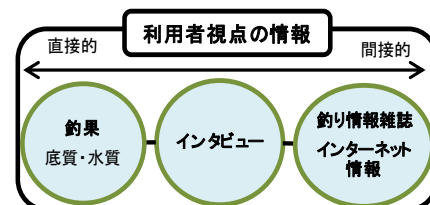


図1. 情報の分類

2. 研究方法

2. 1 調査地点

調査場所は、千葉縣市川市妙典の江戸川放水路中流域(江戸川河口域)とした(図2)。

江戸川放水路は首都圏の市民が身近に水に親しむことのできる貴重な空間となっており、シーズンには水面はマハゼ釣りのボート、水際は釣り人や潮干狩り客、高水敷はバーベキュー客など、河川空間は多様な利用が行われている。²⁾ 行徳可動堰により旧江戸川と仕切られているため、上流からの淡水が流れ込むことがなくほぼ海水であることが大きな特徴である。



図2. 調査地点

2. 2 調査内容

2. 2. 1 河川利用者視点の情報

河川利用者視点の情報として行った河川利用者の推移調査とインタビュー調査では、マハゼ釣りが始まるシーズンである6月からシーズンが終わる11月にかけて、図2の赤色の線で示した右岸側の高水敷で、釣り人やバーベキュー客等の河川利用者に対し利用のしやすさ等についてヒアリング形式でインタビューした。

2. 2. 2 直接的情報

直接的情報として、釣り調査と底質調査を行った。マハゼ釣り調査では、延竿を用いたウキ釣りの仕掛けを用意し、6月の調査では6名、10月では16名で釣りをを行った。底質調査では、図2の黄色の線で示した2つの断面においてボートで河川の左岸から右岸にかけて、下流側10地点、上流側9地点の計19地点の底質をエクマンバージ採泥器を用いて採取した。

3. 結果および考察

3. 1 河川利用者視点の情報分析結果

インタビュー調査実施日の集客数の多いと予想される午後2時に、河川の利用目的別に概略人数を集計した(表1)。江戸川放水路はマハゼ釣りシーズンのピークである9月にかけて釣り人の数(釣り人+釣り船利用者)は各127人、237人、64人であり、河川利用者数合計を見ても9月に745人もの人が利用している場だということがわかる。このような多くの河川利用者の中から少数ではあるがインタビュー調査を行った。

キーワード: 江戸川放水路, 釣り, マハゼ, 河川利用者, インタビュー

連絡先 〒275-8588 千葉県習志野市津田沼 2-17-1 (千葉工業大学 生命環境科学科) TEL:047-478-0452

E-mail:michio.gomyo@it-chiba.ac.jp

「江戸川放水路における釣り人のマナー、ゴミの有無等について」の意見を釣り人 16 名から得られた。その内 10 名からは「ゴミも少なく釣りもしやすい」という意見があり、他の釣り人からも「家族で楽しめる」「安全にできる」「大量に釣れる」という意見も得られた。「江戸川放水路に再度来たいか」という問いかけに対しても、

回答を得た釣り人全 11 名から「今後も来たい」という意見が得られた。以上のように「個人でも家族でも安全かつ楽しく釣りができる」「江戸川放水路には多くのハゼがいる」という意見が多数得られたことから、釣り人の視点から見て江戸川放水路は釣果や自然の満足度が高いためマハゼ釣りのリピーターが増え、多くの釣り人が訪れているのではないかと考えられる。

同じ問いに対し一般利用者 7 名からの意見では、景観が良いとの回答が 3 名からあった一方で、外国人のマナーの悪さやバーベキューで出たゴミの多さを指摘する声が 3 名からあった。以上のことから、一般利用者の視点から見ると、好印象と悪印象の意見が混在する場になっているのではないかと考えられる。

3. 2 直接的情報分析結果

下流右岸側 3 地点が砂質で、その他の地点は泥質であった。ボートでの釣りは主に川の中央部、立ち込んでの釣りは右岸側であるため、釣りをを行う一帯にはカキ礁や岩場等の障害物がないことがわかった。

ハゼ釣り調査では、6 月 19 日（水）の釣り調査では 2 名の釣り未経験者を含む計 6 名で 3 時間ハゼ釣りを行ったところ、釣果は計 64 匹で、未経験者の平均釣果は約 8 匹、未経験者以外の平均釣果は約 12 匹であった。10 月 6 日（日）の釣り調査では 8 名の釣り未経験者を含む計 13 名で 2 時間ハゼ釣りをを行い、釣果は計 62 匹で、未経験者の平均釣果は約 4 匹、未経験者以外の平均釣果は約 6 匹であった。このことから、技量の差は見られるが未経験者でも未経験者以外の者に近い釣果を得られていることがわかった。

これらの結果より、「釣りがしやすい」「家族で楽しめる」「根がかりしない」というインタビュー結果に加え、初心者でも楽しむことができ満足いく釣果が期待できる釣り場であることがわかる。加えて、五明・小山 (2013)³⁾ が報告しているように、釣り宿の HP にて信頼のおける釣果（数とサイズ）が間接的情報として日々公開されていることも釣り場の評価を高めているものと考えられる。

4. まとめ

利用者視点の情報と直接的情報を相対的に見て江戸川放水路はレジャーとしての複合性、安全性、満足度が高く釣り場としての環境が非常に良いと評価されているため、多くの利用客がいる河川であることがわかった。ハゼ釣りシーズン中には多くのハゼが釣れる一方で青潮や台風等の異常現象が発生することもある。釣り場環境の持続性を考える際には、こうした環境変化に対しても釣り場として回復している現状のメカニズムについても調査する必要がある。

参考文献

- 1) 檜山義夫(1996) 『釣り』を考える、(株) つり人社、P.88~P.108
- 2) 市川市ホームページ <http://www.city.ichikawa.lg.jp/>
- 3) 五明美智男、小山誠洋 (2013 年 7 月) レクリエーションとしての釣りの間接的情報分析による環境評価の試み(その 1)、日本沿岸域学会研究討論会 2013 講演概要集 No.26

表 1. 午後 2 時における各河川利用者数

	人数(人)						
	6月9日	6月29日	7月27日	8月31日	9月22日	10月27日	11月31日
釣り人	3	14	15	38	122	36	0
釣り船利用客	0	29	22	89	115	28	0
潮干狩り+水遊び	80	37	20	11	25	3	0
バーベキュー	70	213	353	140	480	198	11
その他	20	10	5	3	3	31	21
河川利用者数合計	173	303	415	281	745	296	32
釣り人の数(釣り人+釣り船利用者)	3	43	37	127	237	64	0